
NO , THANK YOU !

炉濤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NO, THANK YOU!

【Nコード】

N8238Z

【作者名】

炉漣

【あらすじ】

俺は物語の主人公にはなれない様なただの、極普通の、有触れた茶髪の少年と比喻されても可笑しくない、ただの一般人だった。可愛い幼馴染はいるし、生まれながらに茶髪だが、それ以外は決して何もないただの人間だ。

だが、

『あんたも超能力持つてるから』

という、不意に、あまりに突然に母さんから言われたその言葉から、俺の人生は一変することとなった。

iのべるといっ携帯小説サイトで書いていたモノを書き直して掲載するものです。

更新は出来るだけしますが、不定期です。

自宅が火事とやらになりました

自宅が火事とやらになりました

まず言おう。冷気を吐き出す冷蔵庫の様に冷たく、薄く、かつ重い溜息を吐き出してから、だ。

ちゃんな自己紹介や特徴の描写はこの場には値しない。決して、そう、永遠に。永久の時間を過ごしたかの様な感覚が俺の背中に癒着して離れない。気持ち悪さが胸の奥からこみ上げてきて、吐き戻しそうになる。嗚咽を抑えて、喉を絞めて、拳を力強く握り締めたところで何も変わりはない。

そう、俺は今そんな苛立ちと混沌を混ぜたかの様な渦中にいる。いた。

俺の肌を強烈な熱風が煽った。そして、咽る程の黒煙が目の前で天に昇るかの様に揺らめいている。それも大量に。

「おー。派手に燃えてるな！ なあ、母さん？」

「そうですねー。ここまで燃えてると逆に綺麗に感じますわ」

俺の住んでいる いや、住んでいた自宅は木造二階建ての周りに比べて比較的綺麗な青い屋根の家だった。ペンキも塗り替えたばかりで、新居気分、引越し気分であったのは恥ずかしいながら認めなければならぬ。

が、その綺麗な家が、たった今、油の煽られた中華鍋の様に轟々と音をたてて燃え盛っているのだ。

それはもう、熱気よりも驚きで汗を垂れ流してしまう程に、だ。

そもそも、どうしてこうなったか、……、語ってやりたいのは山

ああああああああああ！ 俺の大切のフィギュアにエロゲに抱き枕達があああああああああああああああああああああ！ あああああああああああああああああああああああああああああああ！ いやああああああああああああああああああああああああああああああ！ あ、ブルーレイも」

と酷い叫び声を上げながら未だその勢いを弱めない火事の中に飛び込もうとしている少年が現れた。

俺の横を通り過ぎて本当に飛び込みそうだったのでとりあえず首根っこを掴んでそいつを止める。

その少年は俺をそのまま小さくして、中身をオタクにしたような人間だ。

そう、こいつは俺の弟で、椿の兄である郁坂いくさかだいすけ大介だ。無造作に伸ばされた 手の行き届いていない 長くて、ぼさぼさの茶髪もやっぱり母さんからの遺伝だった。

「ご覧の通り、俺の家族は正直、イカしてる。ある種、だが。」

「はあ……明日が休日によかったわ……」

俺は嘆息と共に嘆きの言葉をこの熱気が支配する空気中に溶かして、学業に影響が出ないであろう事を祈った。

1

「恭介！ 家が全焼したんだって！？ そりゃ良かったな！」

「良いわけあるか！ 叩き倒すぞ！」

あの火事から二日経った今日。俺はなんとか学校へと通うことが出来ていた。

県立三坂高等学校。中の中程の適当でどこにでもありそうな高校

だ。

「ここら一体、つまりは俺達の地元である笠屋町は田舎町で、遠くに通うのが面倒だから、と自身のランクを落してまでこの高校に通う者は多かった。それで良いのかは当人に聞いてくれ。俺にはこの高校が限界だったんだ。」

朝から五月蠅い友人、ロリコン大魔神こと増田典明の頭を引っぱたき、俺は嘆息する。最近は何息、溜息が増えた気がする。一応気をつけては置こうか。

如何にも、なスポーツマン。それが、増田典明だ。顔は何故か整っていて、身長もそこそこありイケメンの部類に入ってしまう彼だが、肝心の中身が法律ギリギリのモノで出来ていて、正直女子からの評判は良くはない。ナンパはされるが、恋人は出来ないタイプだ。この前、「そのロリコン、止まりなさい！」とパトカーにスピーカーで呼び止められてたのは流石の俺でも驚きを隠せなかった。

「いてて……、そんな怒るなよ。ちよつとした冗談だった」俺に叩かれた頭を抱えながら言う典明に「冗談にならねえよ」と返して俺はまた嘆息する。

本当、どうして火事になんかなくなったかな……。典明の言葉の通り、俺の自宅は全焼し、自宅だった何かへと変貌を遂げていた。

今は、どうやって用意したのかは知らんが、親父が用意したボロアパートに五人で住んでいる。正直、狭い。五人が入るスペースはないのだ。

「で、今日なんだけどさ」

「ん？ 何だよ？」

「遊びに行つていいか？」

そんな極小スペースだというのに、典明は他人事だとそんなおちやらけたことを軽々しく吐いてみせる。

「無理、俺の家クソ狭いから」

「まあまあ、そう言わずに。そろそろ俺も椿ちゃんと遊びたいからさー。なあ、頼むよ」

このロリコン野郎は言わずもがな、俺の妹である椿が大好きだ。食べちゃいたい、の言葉の意味が変わってしまうくらいに大好きらしい。

椿は中学二年生だが、その容姿はその何倍に幼く見え、最高で、いや、最低で小学生低学年にまで見られてしまったことがあるくらいだ。

自宅が火事とやらになりまして - 1

そんな椿は勿論、典明の好物である。好物を目の前にした口リコンがどうなるかなんて言うまでもない。

「あーはいはい。お断りですから」

「なんだよー。連れないなー」

「お前が勝手に盛り上がってるだけだろうが」

俺は再び嘆息して、適当なところへと視線を投げ出す。

時計を見れば時刻は八時前。まだ朝のホームルームも始まっていない時間で、クラスは朝のホームルーム前の自由時間をそれぞれが謳歌していた。クラスメイト同士で楽しそうに談笑しているグループも見れば、教室の隅でエロ本呼んでるバカまでいた。これは酷い。

と、その時だった。

「きょうちゃん。おはよう」

空气中に散ってしまう様な細く、かつ繊細、だが綿菓子のようにふわふわとした言葉が俺に掛けられた。

俺はこの言葉に聞き覚えがある。いや、そんなレベルではない。

聞きなれた、俺にとっちゃBGMの様な声だ。

「おう、おはよう。桃」

俺は彼女の名前と一緒に挨拶を投げ、視線を声のした方へとやる。そこには、子どもがいた。日本人形の様な長くて真っ直ぐで前髪を横一線に切りそろえた髪。子猫を連想させるかの様な幼すぎる容姿。だが、スウェットが似合いそうな最近の女子高生らしい雰囲気のあるそんな少女。彼女は俺の幼馴染である、春風桃だ。

彼女とも大分長い付き合いで、年齢イコールと言っても過言ではなく、家族同士の付き合いもあるのだ。

そんな桃が俺の自宅の火事の事を知らないはずがない。案の定、

「きょうちゃん大丈夫だった？ 家が全焼しちゃったんだってねえ。私の家も燃えちゃわないか心配だよー」

と、話の内容とは対照的な非常におっとりとした空気そのものと全く変わらない口調でそう言う桃。心配してくれているのは分かるのだが、口調のせいで他人事だと言われている様な気がしてならない。

「ああ……、つつても綺麗に全焼してくれたモンだよ。逆にスッキリしてるっつかさ。そりゃあイロイロと所持品燃やされたわけだし残念だけでも」

「何か困ったらいつでも何でも話してね？ 長い付き合いなんだしさ」

「おうよ。ありがとな、桃。頼りにしてるぜ」

「桃ちゃん今日も可愛いねえ！」

「五月蠅い。黙ってる」

「じゃあきょうちゃん？ 私いくねー」

「おう、またなー」

ちなみに、今のやたらと低い声の「五月蠅い、黙ってる」という台詞は桃の口から漏れたモノだ。あまりの変貌っぷりに初見の人間は滅多に気付けないが、本当にそうだ。桃は典明と喋るときだけ、こうなってしまう。

つつても、他の人間にはこんな重いセリフを吐きはしないから特別な問題はないんだがな。

クラスメイトの下へとパタパタと走っていく桃の背中を見送って俺は再び、

「なあ恭介！ なんで桃ちゃん俺にあんなに冷たいんだろう……」

涙目で死刑宣告を受けた無罪の人間の如く俺に訴えてきた。冤罪を背負わされた人間ってこんな感じなんだろうなあ、という驚異的な見本である。

「お前がロリコンだから……、とは言わないけどよ。誰彼構わずそんな変態的セリフを吹っかけるからじゃねえの？」

「俺は誰彼構わず声を掛けたりしない！」
「ついさっきまで椿の話で一人で盛り上がったただらうが！」
そしてまた。

気付いた。俺の嘆息の原因はきつとこいつだ。典明があまりにもボケるもんだからついつい突っ込みたくなっちゃって、精神的にやられてきたんだらう。きつとそうだ。

俺の嘆息は桃の言葉とは正反対でとても重い。空気中に溶けはせず、そのまま熟した林檎の様に地面へと重力に引かれるままに落ちて、砕け散った。

2

俺の通う三坂高校は県立だ。しかも田舎町笠屋町にある古ぼけた高校だ。

そんな高校にはクーラーなんてモノはない。だから、初夏に足を踏み入れた今、教室の室温はバカにならない程高くなる。おまけに湿度もだ。どうしてあんなに蒸し暑くなるのかは分からないが、きつと生徒達の汗がそうさせているのだと適当な予測を立ててみる。そうだとすると、あの可愛い女子生徒達の汗に包まれているんだ！なんて考えてしまいそうになったが、共学である以上野郎共もいるわけで……、これ以上は何も言わないでおこう。

そんな蒸し暑さと数時間も戦いきつてやつとの放課後。

外に出れば涼しさが押し寄せてくる、なんてことはない。外は外で教室内とはまた違った乾いた暑さが俺に降りかかってくる。逃げ場はなく、ひたすら肌を焼け焦がすしかない拷問の様な帰路を辿らなくてはならなくなる。

「あぢい……、このままじゃ需要のなくなったアイスみたにドロドロに溶けちゃうわ……」

俺の口からは暑さのせいか意味不明なそんな弱音が漏れていた。

新しい自宅、仮住まいのアパートは三坂高校からそんなに遠くはない。全焼してしまった前の家と比べてもそう変わりはない。

だが、なぜだろうか。道になれていないからなのか、今日の帰路は少しばかり長く感じた。

自宅が火事とやらになりまして - 2

笠屋町は基本的に……、いや、その全てが田舎だ。それもドが付いても良い程の、だ。隣町の真砂町はそこそこ発展した文明をお持ちだが、それはまた別の話。

そんな笠屋町の通学路はやっぱり田舎道で、現に俺が今ダラダラと歩いているのもその例外ではない。足元は整備不良のひび割れたコンクリートで、周りに見える景色は山、からぶき屋根の家、田畑、と相当な景色が広がっている。

更に良く見ればヤンキーカップルが森の足元でエッチなこととして光景なんかが見えてしまうが、好奇心や性欲よりも面倒事に巻き込まれたくない、という理性が勝ってなかつた事になる。

「はあ……盛ってんじゃねえーよ、畜生。太陽もだけど」
はあ、と溜息を吐き出して俺は延々と続く先の見えない田舎道をひたすらに歩く。

この道さえ越えてしまえば、後は楽だ。住宅街に入れば景色も大分見栄えする物になるし、精神的には少し楽になる。

よし、頑張るぞー、と適当に息こんで額に滲む嫌な汗を腕で拭いたその時だった。

「恭介ー！ 奇遇だな！」

聞き慣れ……過ぎた声が後方から掛けられた。振り向かずとも分かる、典明だろう。

相変わらず止まらない溜息を抵抗なく吐き出して、俺は仕方なしに振り返る。振り返って、やっと、気付いた。まず目に入るのは間違いない典明だった。ただし、汗だくで全力疾走中の典明、だ。

まるで猛獣に追われているかの様な走りっぷりに思わず「気持ち悪いな」と呟いてしまっそうだった。

が、そんな余裕は一瞬でなくなった。典明を追いかける『猛

獣達』。『彼ら』が目に入ったからだ。

典明の後方にはスーツを着た『いかにも』なスキンヘッドにサングラスを掛けたスーツを着た二人組みが獲物を狩る猛獣の様に全力疾走していた。勿論獲物は、典明であろう。

そして、典明はその猛獣二人を引き連れて 真っ直ぐに俺の方へと向かって来ている。

あいつ、俺を巻き込むつもりかよ！

「ぎゃあ！？ こっち向かってくんない！ ロリコン！」

「一本道なんだから仕方ないだろー！？」

そう言いながらも典明も猛獣達も走り続け、あつという間に俺との距離は縮まってしまふ。そうなれば、俺も走るしかない。

俺は早急に走り出し、典明達に出来るだけ近づかれない様に全力を出した。俺は運動神経は良い方だ。頭はソコソコだがな！ だから、典明達との距離は一定を保ち続ける事が出来た。それに典明も猛獣達も俺が走るよりも前から走っている。体力的な問題もあつてか俺が追いつかれることはないのだ。

ふはは、典明め！ 俺を面倒後事に巻き込もうなんてするからだ！

と、俺は絶対安全圏にいる、なんて思っていた。いたんだ。

「郁坂恭介じゃねえか！ ラッキー！ まさか本命まで案内してくれるとはねえっ！」

が、俺は安全圏になんかいなかった、と思い知らされる事となった。

背後……いや、遠いはずなのにやたらと近くから響いた声に俺は思わず足を止めそうになってしまった。勿論、今呼ばれた俺の名前は聞き間違いかも知れない。だから、俺は決して焦ったりせず、一瞬だけ迷った思考をすぐに振り切ってまた全力で駆け出したのだ。面倒から逃げ出すために。

「郁坂恭介え！ てめえの親父から受けた痛みをてめえに倍で返してやつからなあ！ 楽しみにしてるよお！ ぎゃはは！」

だけど、俺の思考は遠く離れた位置から再び近くまで引き寄せら

れてしまった。

(あのヤクザ連中　なんで俺の名前を　ッ!?)

やはり、驚きから足を止めてしまいそうになった。だが、俺は振り返りも止まりもしなかった。言わずもがな、面倒事が嫌だから。

緊張はストレスになる。とつとこの現状から抜け出して典明をぶん殴って折檻してやりたい。丁度、そう思っただけで悲鳴を上げた時だった。

「ぐあっ!!」

突如として聞こえて来た典明のか細い悲鳴と、何かが弾ける様な音を聞いて俺はついに立ち止まってしまった。

俺が振り向くより前に、『何か』が無様にも倒れる音が耳に届いた。その『何か』が、典明だという事に気付くまでにそう時間を必要とはしなかった。

「典明イ！」

俺は目の前に危険な人物が二人もいることも忘れ、典明の下へと駆け寄った。近づけば近づく程彼らとの距離も近づいてしまうのだが、そんな事を考えている余裕はなかった。この時俺は、彼らが典明に何か危険なことをしたのでは、と疑っていた。事実、そうなのだが、その時俺が考えていたのはもつと現実的な物で、決して『超能力』なんて幻想的ファンタジーな物ではなかった、と言い切れる。

「おい！　典明！　シツカリしろッ！」

俺が必死に叫び、典明の身体を揺さぶると、ある光景を見つけてしまった。典明の着ている学校制服のカッターシャツの背中が、くりぬかれたかのように巨大で、焦げ臭さを放つ穴を開けていたのだ。見れば、穴の淵は炭の様に固まり、黒く焦げていて、その穴から見える典明の背中では火傷したかのように赤く膨れ上がり、所々水ぶくれを起こしてしまっていた。その光景はまるで、そう、稲妻に撃たれたかのような光景だったと言える。

自宅が火事とやらになりまして - 3

(……………何が……………?)

相手が相手なモンだから、俺はてつきり銃にでも撃たれたのかと思っていたが、典明の背中に広がるその傷は間違いない銃弾によるモノではなかった。勿論、本物の弾痕を見た事はないが、素人目でもそうだと分かるほどにこの結果は明白だった。

と、典明に落していた視線の隅に、靴の先が写しだされる。土を爪先で擦る音が嫌に耳に付いた。反応して視線を上げると、やはり二人の猛獣が目の前にいたのだった。

二人組みの男は俺と典明の事をニタニタと不気味な笑みを浮かべながら見下ろしている。涎に塗れて輝く並びの悪い歯が不潔感を俺に印象付けた。

「郁坂恭介え……………探したぜえ……………」

片割れが落ちている大金を見つけたかのような調子で俺に吐いた。「さつきつから、何で俺の名前を……………」

ヤクザなんかと対面させられて、俺は正直怯えていた。何故か俺を狙っているヤクザ二人。この状況まで追い詰められれば逃げ道はない。何か、恐ろしいことをされてしまうのではないかと嫌な予感が脳裏を過ぎり、常駐してしまう。

俺の震えた声での質問は相手にちゃんと伝わったのだろうか、と他に心配することがあるだろう、と言いたくなる様な疑問が頭に浮かんで離れなかった。

勿論、震えた声であろうと距離が近いだけに声は簡単に届き、

「なんでって、そりやお前が郁坂流の息子だからだよ！」

「親父……………親父がなにか……………」

「俺等はなあ、君の父親……………郁坂流に恨みがあるんだよ。だあかあ

らあ、息子である君に償ってもらおうかなあって俺達は考えててるんだよねえ」

「そうそう。郁坂流はバケモンだからあ、ただの人間な君に仕返しをしようかねえ、」

なんて身勝手に我儘な理由だ、とは混乱して落ち着きの取り戻せない頭でも思えた。

それに、こいつらが親父とどういう関係にあるかは知らないが、俺は親父は間違ったことはしない、と信じている。だからきつと、こいつらは身勝手な事情で勝手に親父を恨んで、俺を巻き込んだんだろう、何も考えずとも思えた。

面倒事はごめんだ。ずっとそうやってイロイロと避けてきた。だから、俺はいざ面倒事に巻き込まれた場合の行動を頭に入れてなんかいない。だから、ただひたすらに力に怯えて、身と心を振るわせるしかなかった。

背筋が凍りつき、喉を素手で掴まれているかのような苦しさが胸の内から面へとこみ上げてくる。

こんな状況からは早く去りたい。そうは思うが、友人《典明》を置いていく、という考えは俺の頭には浮かばなかった。

面倒から逃げ出したい。そうは思うが、そんなことよりも、傷ついた友人を救うのがマズ先だと本能が叫んでいた。勿論、典明の背中の傷は大した事なく、命に関わるなんて事は絶対にならないのだが、焦った俺は典明が死んでしまうのではないかと思っってしまったのだ。

だから、この場を離れて背を向けて走り去ることが出来なかった。「さあつて、と。周りに人はいねえみたいだし、とつと片付けて帰らせてもらいましょーか！」

「そうだなあ！」

連中二人がそう言うのと、不意に、連中二人の掌の中で『青い閃光』が弾けた。

先程聞いたのと同じ、空気中で何かが弾ける様な音が今度は目の

前で聞こえた。勿論俺は驚愕して目を見開かせ、頭の中を真っ白にした状態で連中の掌、音のした方へと目をやった。

すると、そこには、

「さあ、死ね」

そう言う連中の掌、その中には、青白く、夜空の様に輝きを放ちながら弾け続け、その姿を常に変え続けている『稲妻』を見つけてしまった。それは、掌に纏う様に連中の掌の中、上、で流動し続け、酸素を爆発させながらその勢いを加速させ続けている。

「な……なんだよソレ!？」

俺は完全に状況に中てられ、思考を完全に停止させ、視線を連中の掌に釘付けにして、俺はただ怯えていた。その間も、連中の青白い稲妻を纏った掌は俺の頭を鷲掴みにするかの如く伸びて来ていて、(……もう、死ぬのか……?)

素直に、本能が死を感じ取った。

この掌が俺の頭に届けば、その瞬間に俺の意識は吹き飛び、全身を激しく痙攣させながら無様にも死ぬのだろう。そんな残酷な現実がハッキリと脳に浮かび上がった。

二人いる連中の片割れが、突然意識を絶たれたかの様に、バタリと力なく倒れたのだ。

あまりに突拍子もない出来事に俺もヤクザも驚き、目を見開いて倒れたヤクザへと目をやる。一瞬の判断だが、外傷は全く伺えなかった。まるで、恐怖に中てられて意識だけを失った、といわんばかりの状況だった。

全く何もわからない状況の中で、俺は自我を保つために頭かぶりを振って、もう一度、と視線をヤクザの向こう側へと投げる。

と、そこには、

「おおおおおおおおお！ 貴様あああああああああああああああああああ！ 俺の息子になにやってんじやゴルアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

何故だろうか、獲物を狩る猛獣の如く、拳を掲げてこちらへと全力疾走してくる親父の姿が見えた気がした。

いや、間違いなくあれは親父だ。郁坂流だ。

親父の形相は鬼の如く恐怖だけを残して歪み、見ただけで失神しても可笑しくない様な、とてもこの世の物とは思えないとんでもない表情になっていた。

そりゃ、あの顔見れば気絶もするわ。と、先程意識を失ったヤクザにも少しばかり同情してしまう。

親父は百獣の王も尻尾を巻いて逃げ出してしまいそうな雄叫びをあげながら全力疾走でヤクザへとあつという間に辿り着き……、そのごつい、岩の様な拳でヤクザの頬をぶん殴った。

俺の目の前で起きたその光景は酷いモンだった。親父の拳を叩き付けられたヤクザの顔面は波打つように派手に歪み、数本の歯と涎、鮮血を空气中に花火の様にばら撒きながら、あつという間に吹き飛び、田んぼに突っ込み、泥を巻き込みながらゴロゴロと数十メートル程転がり、田んぼを二つ越えた時点でやっと、その動きを止める

ことが出来たようだ。

ヤクザは泥まみれで、距離もあり、目を凝らさなければ今一その存在も確認できない。

「お、親父……!？」

「ワハハ、恭介。俺のごたごたに巻きこんじまって、すまないなあ！」

なんて呑気なおじさんだろうか。

「ちょ……! そんなことより、典明が！」

聞きたいことはいくらでもある。だが、そんなことは後回しだ。

今俺の足元には負傷した典明がいる。このタイミングになって俺もやっと、典明が死ぬほどの傷ではない、と気付くが、それでも心配だったのだ。

「ふむ？」

親父は僅かに唸り、しゃがみこんで典明の背中の中火傷の様な傷跡をまじまじと観察するかの様に見つめて、

自宅が火事とやらになりまして - 5

「これおくらい唾でも付けとけば治るわ！　がははは！」

と、親父はコメディ映画を見ているかの様な陽気な笑い声を上げてバンバンと干した布団を叩くかの如く典明の傷跡を何回も叩いてみせる。その度に典明の体が反動やら痛みやらでビクンビクンしているのが少しグロテスクな光景にも覺えた。

「つーか、こいつら何なんだよ！？　なんか、親父のこと言ってたぞ！」

典明の無事を確認した俺は話しの路線をシリアスな方向へと乗せ変えて、足元の意識を失ったヤクザに人差し指を下ろして怒鳴るように親父に問う。

こいつらは「親父の仕返し」だと、俺を襲った。俺を探し出すために典明に行き着き、今までの様な状況になったのだろう。

だとしたら、親父が何か原因を持っているはずだ。

問いただしてやらねえと気がすまない。なんたって俺は被害者だからな。

「つーか、あれくらいの土壇場には慣れておかないと後々こまるわよ？　文句言つてんじゃないの」

が、母さんは相変わらずの俺への態度でそんなことを言ってみせた。

何考えてるんだ！　息子が死にそうだったんだぞ！

と、俺がガラにもなく真剣に怒ってやるうかと思ったその時だった。

身長の高い親父が少しだけしゃがみ、俺と視線を合わせて、こんな『ふざけたこと』を言ってみせた。

「恭介。超能力って、信じるか？」

「はあ？」

親父のセリフは、今の俺には理解できなかった。勿論、単語単語の意味がわかる。そこまでバカじゃねえしな。だが、文としての意味はさっぱりだった。こんな状況で、「超能力を信じるか？」だと？ それこそ、親父の言葉が本当なのか信じられるか答えなくてはならない。

「　　こんな状況だつてのに何言ってるんだよ！？」
俺が怒鳴ると、

「そつだよなあ。まあ、最初は信じられないよなあ」

と、親父は俺の求める答えを決して吐かずにそんな独り言みたいなことを呟く。

質問に答えるよ！……俺がそう叫ぼうとしたその時だった。

珍しく、母さんが俺の肩に手を置いて俺を振り向かせた。素直に振り向くと、母さんの見た事もないような真面目な表情が目の前にあった。滅多に見れないであろう母さんの真剣な面持ちに俺は思わず息を呑んで、叫ぶのも忘れて母さんの言葉を待ってしまった。

数秒もない、長い時間が過ぎて、母さんの薄く綺麗な唇から、言葉が漏れる。

「信じられないだろうけど、私達は超能力者なのよ。信じられないだろうけど、ね」

「はい？　何言ってるの？」

全くもって理解できそうにない言葉に俺は思わず首を傾げた。

超能力を信じるか？　超能力者だ。　理解できるかよ！

「何言ってるんだよさつきから！　俺が、息子が殺されかけてんだぞ！？」　何呑気に冗談言ってるんだよ！？」

そろそろ堪忍袋の尾が切れそうだ。この親共……、一体何考えてやがんだ。今までのやたら呑気だよな、とは考えていたが、まさかここまで酷かったとは思わなかった。火事の話は、まあ、命あつたし流せるとしても、今回ばかりはそうはいかない。

と、俺がコメカミにビキビキと太い血管を浮かび上がらせ始めた
と同時だった。俺の目の前にいる母さんは、『俺の怒りなんかがち
っぽけに思えるくらいに怒りの表情』　まさに鬼そのものといえ
るモノ　を浮かべて、

「お父さんに謝りなさあ　あああああああああああああ
！」

と、俺の九尾に的確すぎる正拳突きを放ちやがった。

「うっ!?!」

確実に仕留めるために打ち込まれた母さんの正拳突きは、これ
もか、と言わんばかりにクリティカルヒットして俺の全身に激痛を
走らせ、感覚を揺さぶった。

そんなプロボクサー顔負けの一撃を貰った俺の意識は、フェード
アウトするかの様に、徐々に消えて行くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8238z/>

NO, THANK YOU!

2011年12月31日02時50分発行